

インフルエンザ治療薬の透析患者への投与についての注意点

今期、インフルエンザは過去5年で最高のスピードで蔓延している。国立感染研究所の集計では、2019年第49週（12月2～8日）の患者報告数は4万7,200人、定点当たりの報告数は9.52で前週の5.52から増加した^{参考URL 1)}（図）。この事態は感染弱者である透析患者にとって緊急の対応が必要とされる。本稿では、透析患者および家族がインフルエンザを疑わせる症状が出たときの対応を述べる。

●インフルエンザの診断

透析患者が、高熱・咳・全身倦怠感を急激に訴えたとき、インフルエンザ感染を疑い、インフルエンザ検査ができるところでは施行する。

迅速検査で、

- ① A型と出たら、「新型インフルエンザ」の可能性があると診断
- ② B型と出たら、B型インフルエンザと診断
- ③ 陰性と出ても臨床症状などからインフルエンザと疑診される場合

この①～③すべての場合に抗インフルエンザ薬を投与し、透析以外の外出を禁じ自宅療養とする。重症であれば「発症48時間以内」の記載にはこだわらない。

- ④ インフルエンザとしては非典型的な場合にも、患者に経過を十分観察し高熱など変わったことがあれば当日中でも再度受診するよう伝え、治療のタイミングを失わないよう取り計らう。

●抗インフルエンザ薬の投与

抗インフルエンザ薬としては、oseltamivir（タミフル[®] 75 mg/カプセル）2カプセルを手渡しすぐに1カプセルを服用、5日後症状が残ればさらに1カプセルを服用するように指示する。透析患者の家族や友人が発症して患者が濃厚接触した場合は、患者の同意をとって1カプセル服用を勧める。

気道刺激があり喘息のある場合には向かないもののzanamivir（リレンザ[®]）を選択した場合は、1回10 mg（5 mg ブリスターを2ブリスター）を1日2回5日間、予防に用いる場合は10 mgを1日1回10日間、専用の吸入器で吸入する。経過中、呼吸困難や意識障害の兆候があれば、ためらわず呼吸管理と透析のできる病院での入院加療に切り替える。新薬 baloxavir（ゾフルーザ[®]）については耐性菌を生じることが報告され、慎重な対応が必要である。

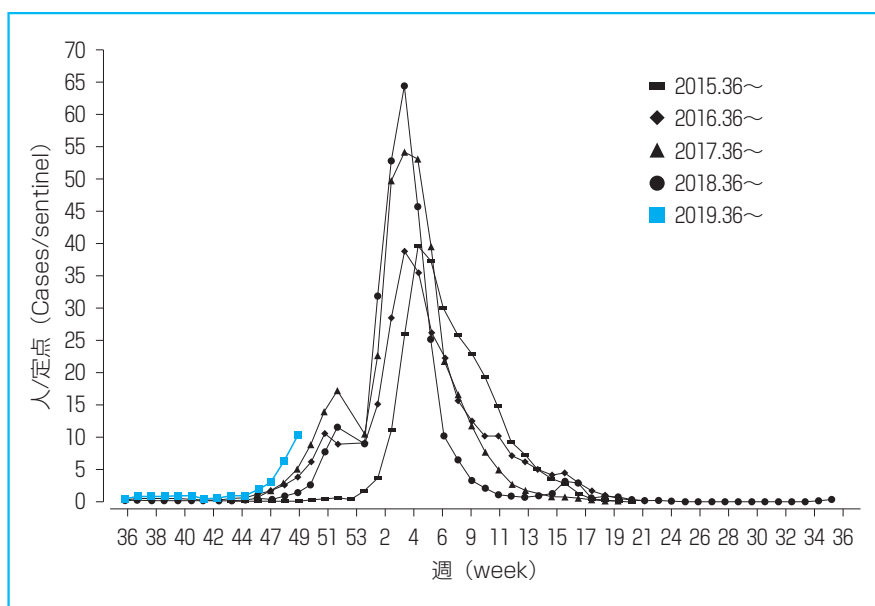


図 定点医療機関当たりのインフルエンザ患者報告例
〔東京都感染症情報センター 参考 URL 2) より抜粋〕

思い起こせば、2009 年 8 月のパンデミック中に死亡した新型インフルエンザ患者 8 名のうち、受診から死亡まで 2 日以下の患者が 5 名にのぼる。非常に速い経過をとるので、「次の透析のときに診てあげる」という対応では手遅れとなりうることを念頭に診療に当たっていただきたい。

■ 参考 URL (2019 年 12 月現在)

- 1) 国立感染症研究所：インフルエンザ流行レベルマップ。
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/flu-map.html>
- 2) 東京都感染症情報センター：インフルエンザの流行状況（東京都 2019-2020 年シーズン）
<http://idsc.tokyo-eiken.go.jp/diseases/flu/flu/>

2019 年 12 月 18 日

秋葉 隆
(東京ネクスト内科・透析クリニック)